

東京都三鷹市

天文台構内古墳

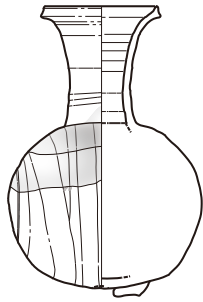


三鷹市教育委員会
三鷹市遺跡調査会

天文台構内古墳の調査成果 ダイジェスト

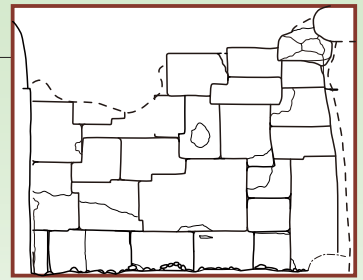
すえき フラスコ形の須恵器

フラスコのような形からの名で、一般には長頸瓶ちようけいひんと呼ばれます。静岡県・湖西古窯産。関東や東北にも多く見られる搬入品。胴の形や頸の太さや長さからみて7世紀後半（第3四半期）の作です。



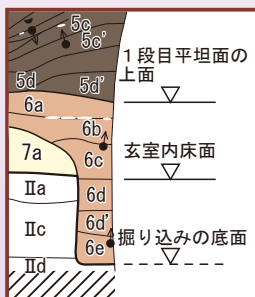
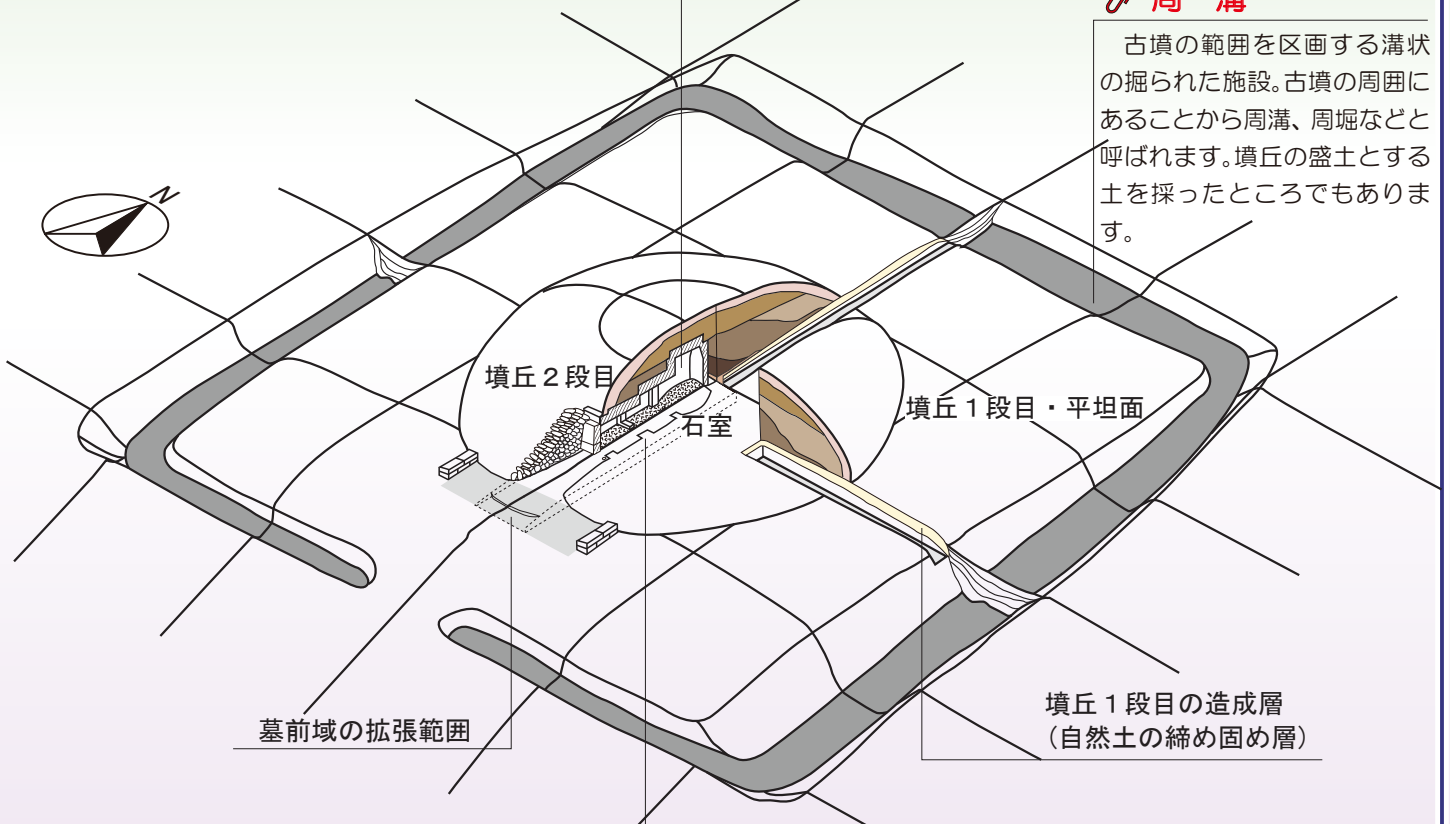
きりいしづ きりく 切石積み・切組み

石室にはとても軟質な石が使用されています。現地に持ち込まれた石材を、直立方体に切り出し、数段に積み上げています。また地震などで石が動かないよう、天地左右の石との間が固定できる切組みと呼ばれる細工が施されていて見事です。



しゅう こう 周溝

古墳の範囲を区画する溝状の掘られた施設。古墳の周囲にあることから周溝、周堀などと呼ばれます。墳丘の盛土とする土を採ったところでもあります。



じぎょう 掘り込み地業

今風にいえば地盤改良工事。建物や古墳の地下の基礎を堅固にするために地面を掘り下げ、版築と同様に種類の異なる土を交互に層状に入れ、つき固める土工技法です。

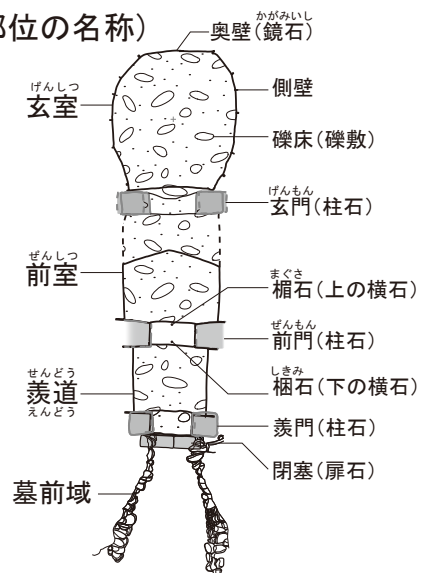
はんちく 版築的な土工法

版築とよばれる本来の土工技法は、木板で土を止め泥土を幾層にもつき固める技法をいいますが、本古墳では黒色土とローム土（赤土）を交互に段層積としています。1枚の層も厚く、簡易な土工法で行われているようです。



石室模式図

（各部位の名称）



調査の経緯

大沢の国立天文台敷地内にあります土盛による高塚古墳－天文台構内古墳－は、昭和 45(1970) 年と 46 年に2度の発掘調査が行われましたが、詳しい内容がわからないままでした。

三鷹市教育委員会では、土地の管理者である国立天文台と東京大学の理解と協力により、平成 16 年度に測量、翌年度から断続的に 21 年度までの5箇年間、将来の公開・活用を見据えた3度目となる再調査を実施しました。

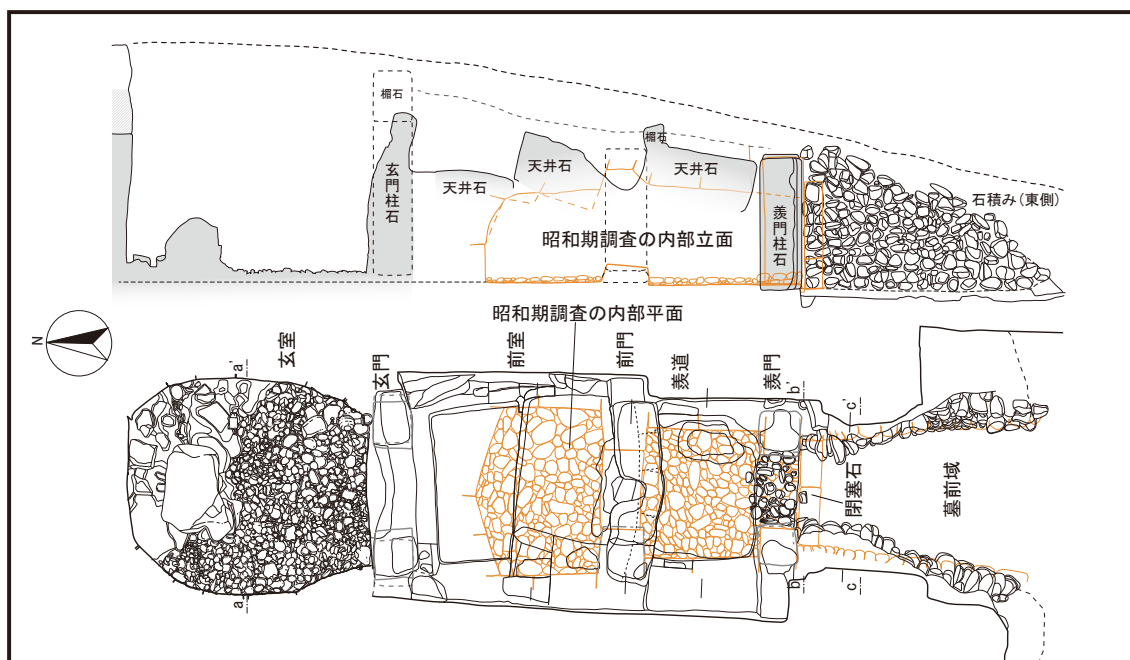
調査は古墳をできるだけ傷つけずに効率よく掘るため、**トレンチ**(試掘溝)と呼ばれる細長い調査区を設定し、墳丘や石室上部、古墳の周囲についての調査を進めてきました。

昭和期の調査の再現、再確認を目的として開始したところ、遺体を安置する玄室と呼ばれる切石積みの部屋が新たに発見され、合わせて3室構成となる**横穴式石室**であることがわかりました。

市では学識者による古墳調査委員会を設置し、調査方法や範囲などを慎重に検討し、合わせて文化庁や東京都教育委員会から助言・指導を受けながら市内の発掘調査を系統的に実施している三鷹市遺跡調査会に調査を依頼してきました。

調査の結果、この古墳は全国的にも稀な上円下方墳と呼ばれる特異な形と判明し、平成 17 年度に国史跡に指定された府中市武蔵府中熊野神社古墳につぐ発掘で解明された4例目となったわけです。

ひと通り調査を終了し、土嚢^{のう}や防水シートなどを使った丁寧な埋戻しが行われ、今は現地で調査前の古墳の姿を遠目で見ることができます。



古墳のかたちと構造～墳丘と周溝～

本古墳は、四方を~~周溝~~に囲まれた方形（南北 30 ～ 31m、東西 25 ～ 27m）の第 1 段目と、その上に円形（直径 18.6m）の墳丘からなる 2 段構成の古墳です。高さは墳頂近くの土が流失し現在 2.1m ほどですが、当時は 3.6m ほどあったと考えられています。正面から見ようとすると南側の小谷戸から望むことになりますが、谷戸下からは 7m ほどの比高であるため、見上げるほどの高さであったに違いありません。

古墳の 1 段目は地盤改良の後、当時の表土面を固く締めつけた平坦な硬化面を成形し整地します。石室の入口側が南傾斜することから、後の造作で別な土で盛土し、少し厚い段に仕上げています。

2 段目の墳丘をつくり上げるには多量の土が必要となりますが、実は古墳の周りには幅広い所で約 8m、深い所で約 2m の溝が巡っています。この周溝の一つの目的は採土の場でもあったわけです。墳丘の盛土の土には周溝の底に見られるローム土（赤土）が使用されていることからわかります。

古墳の主体となる石室は 1 段目に置かれ、上部は円形の墳丘盛土のなかにすっぽりと収まる設計です。

南向きの入口部には石積みの墓前域、その南には溝が途切れる「土橋」があり、唯一地続きの場が用意されています。



▲ 北東コーナーの周溝。隅が少し丸い逆 L 字形をしている



▲ 盛土でつくられた古墳の中身は、バームクーヘンのような幾重もの土層が堆積している

出土遺物と古墳の年代



古墳や埋葬施設の形態、規模を比較し、およその築成年代を推定することは可能ですが、副葬品などが発見されれば、その年代がさらに限定されるというものです。本古墳の玄室からは、~~フラスコ~~形の**須恵器**と 2 点の坏形土師器が壊れない状態で発見されました。ともに 7 世紀後半（第 3 四半期 660 年前後）のもので、これらの土器が発見されたことで、本古



墳の築成年代が決定されました。

ただ流通や追葬といった時間差も考える必要があり、必ずしも古墳完成の時＝土器の製作年代とは限らないわけですが、年代を特定できる土器が本古墳で発見されたことにより、古墳の比較や築造年代を巡る研究、ひいては歴史研究に大きな一石を投じることとなる重要な発見となりました。

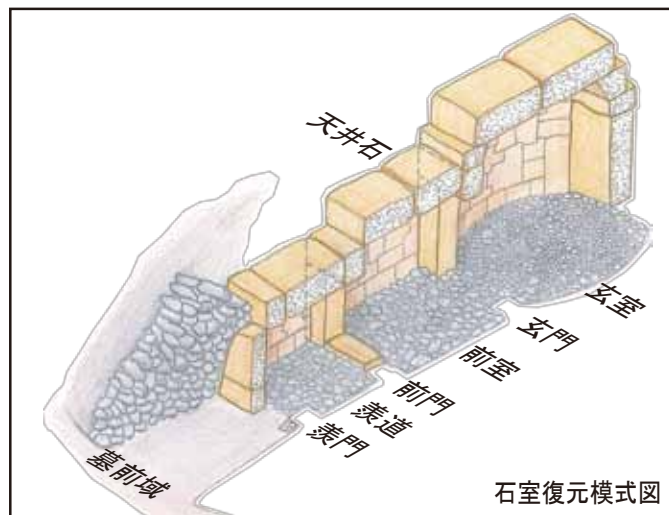
古墳の構造～石室・墓前域～

古墳で最も重要となる所は埋葬施設です。この古墳は追葬が可能な横方向に入口を設ける横穴式石室と呼ばれるものとして構築されています。墳丘の中心、頂上の真下には埋葬する部屋である玄室があり、南の入口に向かって前室、羨道のある3室構造です。

各室は天井石、壁石、部屋仕切り用の門柱石と両柱の上に横断するは楣(まぐさ)石から構成され、床には直径3～5 cm ほどの川原石が敷き詰められています。玄室の平面形は三味線胴のような丸味があり、これを**胴張り形**といいます。多摩川上・中流域の玄室形状のひとつの特徴とされています。市内で発見される横穴墓もこの形が多用されています。

入口部に附属した墓前域と呼ばれる空間には「ハ」の字形に広がる川原石による積石が見られます。府中市の熊野神社古墳の例とよく似た形です。

多摩川上・中流域の古墳の中には同類の石室がみられますが、部屋数の違いや切石か川原石利用かの別があり、首長クラスの墓と言われる中でも階層差があるようです。単室より複室、川原石より切石という序列、つまり天文台構内古墳の被葬者はかなり上のクラスということがいえそうです。



石室復元模式図



▲ 玄室から見た石室の上面。手前のU字形は楣石が折れ曲がったようす

古墳づくりの土木と石工技術

何々もある石材を積むための基盤整備、つまり今風にいえば地盤改良(掘り込み地業)が行われています。石室より一回り広い範囲を、深さ 70cm ほどに一端掘り窪め、改めて凹みの中に黒土やローム土を互層に叩き締めて積み上げ、**版築的な土工法**により強固な地盤につくり変えています。

現地に持ち込まれた石材はこの地で加工され、墳丘に土盛りする作業と並行しながら積み上げられたようです。石壁の外側から支える盛り土のなかに、石加工時に出るたくさんの石屑が、面状に堆積していたことから推測されます。

石室の**切石積み**は、簡単には動かないような細工(切組み)が施されています。石積みが現代に至っても崩れ落ちないのは、こうした石加工の技が裏打ちされていたからにほかなりません。

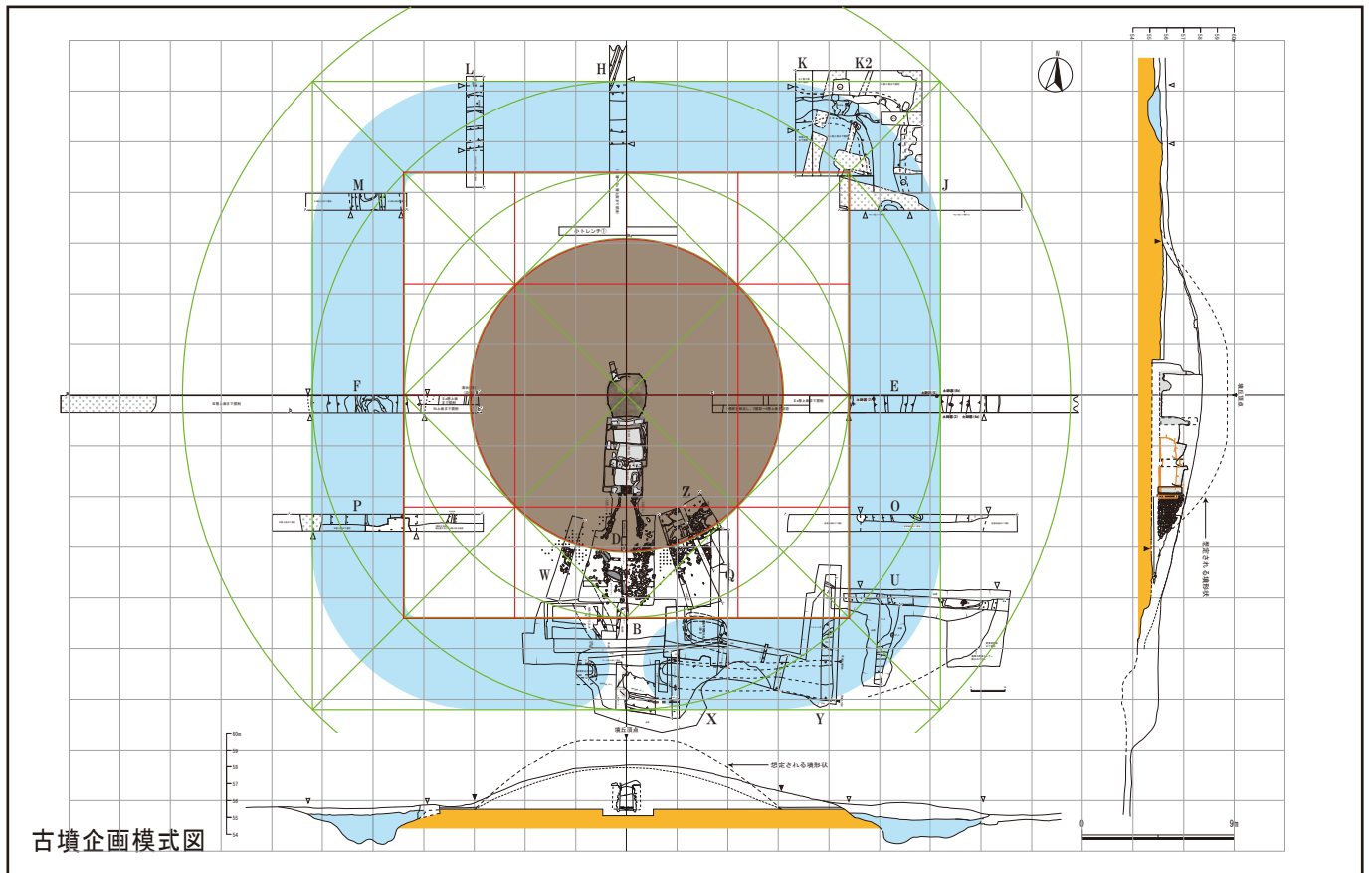


▲ 玄室西壁の切石積みと切組みのようす



▲ 玄室内に落下した天井石などの一部(黄色いもの)が見える

古墳のかたちと設計～上円下方墳～



古墳といえば前方後円墳など雄大なものが思い浮かびますが、古墳の大半は実は円墳で大小様々なものがあります。本古墳は古墳時代も終盤をむかえ、権力の象徴を古墳の大きさに示す時代の幕が引かれる頃に造られたものです。

本古墳は、周溝で囲まれた方形の1段目の中央に円形の墳丘が築造された、とても特異な形をしたもので、上円下方墳と呼ばれているもののひとつです。

ところで、**古墳づくり**を進めるためには企画プランがあったものと考えられます。上図はその想定図です。基準点は重要な玄室の中央。入口方向に中心軸を

決定します。図の描画は調査によって判明した2段目の墳丘の直径でまず円弧(茶)を描く。次にその円に接する正方形を描き、それを外側に繰り返して描いたもの(緑)です。すると、調査で判明した周溝の外ラインや周溝に囲まれた第1段目の方形ラインとが多くの箇所重なっていることが図からもわかります(青)。

これまでの発掘調査で**検証された上円下方墳**は、東京都府中市の武蔵府中熊野神社古墳をはじめ奈良県～京都府堺の石のカラト古墳、静岡県清水柳北1号墳そして福島県の野地久保古墳の4例ですが、基本的には同じような図法で企画プランが読み取れるようです。



▲ 昭和期調査時の閉塞石(扉石)のようす



▲ 南に入口部を向けた横穴式石室



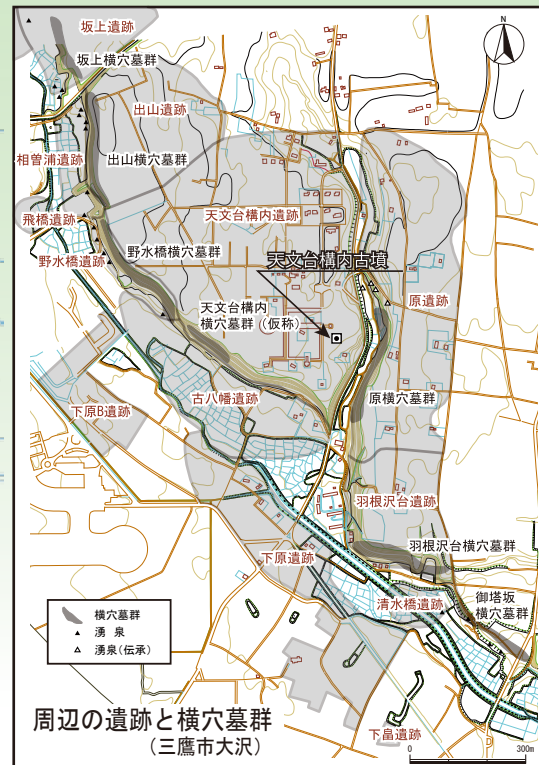
天文台構内古墳の位置



- | | | | | |
|------------------|------------------|----------------|-----------------|-------------------|
| 1. 大田区多摩川台古墳群 | 9. 世田谷区砧古墳群 | 17. 府中市高倉古墳群 | 25. 日野市坂西横穴墓群 | 33. 川崎市第六天古墳 |
| 2. 大田区多摩川台5号墳 | 10. 世田谷区喜多見稲荷塚古墳 | 18. 武蔵府中熊野神社古墳 | 26. 日野市セツ塚古墳 | 34. 川崎市法界塚1号墳 |
| 3. 大田区鞍馬塚古墳 | 11. 狛江市狛江古墳群 | 19. 国立市下谷保古墳群 | 27. 昭島市経塚下古墳 | 35. 川崎市馬絹古墳 |
| 4. 大田区浅間塚古墳 | 12. 調布市狐塚古墳 | 20. 国立市青柳古墳群 | 28. 昭島市浄土古墳群 | 36. 八王子市小宮古墳 |
| 5. 世田谷区等々力溪谷横穴墓群 | 13. 調布市下市田古墳群 | 21. 多摩市塚原古墳群 | 29. 八王子市北大谷古墳 | 37. 横浜市赤田古墳 |
| 6. 世田谷区野毛古墳群 | 14. 調布市下石原古墳群 | 22. 多摩市稲荷塚古墳 | 30. あきる野市瀬戸岡古墳群 | 38. 横浜市三保杉沢古墳 |
| 7. 世田谷区殿山1号墳 | 15. 調布市飛田給古墳群 | 23. 多摩市日井塚古墳 | 31. 川崎市加瀬第9号墳 | 39. 横浜市稲荷前古墳群16号墳 |
| 8. 世田谷区大蔵1号墳 | 16. 府中市白糸台古墳群 | 24. 日野市梵天山横穴墓群 | 32. 川崎市加瀬第3号墳 | 40. 多摩市中和横穴墓群 |

多摩川流域の主要な後・終末期古墳および横穴墓の分布図

府中市教育委員会2005『武蔵府中熊野神社古墳』に一部加筆



周辺の遺跡と横穴墓群 (三鷹市大沢)
国土地理院発行の空中写真—1948年GHQ撮影—を利用して作成 (標高読み取り後加筆)

まとめと展望

天文台構内古墳は、墳丘のかたちや石室構造、各種の先進的な土木技術の採用などを総合すると、古墳時代の終わり頃に地域一帯を支配した首長クラスの墓と考えることができます。

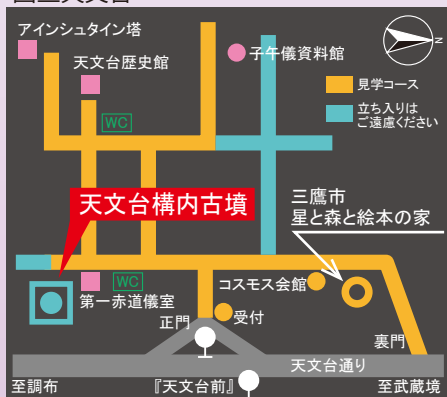
ところで、7kmほど西にはやはり首長墓とされる武蔵府中熊野神社古墳があります。本古墳に比べ、その作りや技術の差、古墳や石室規模が一回り大きいなど相違点があるものの、相似形ともいえますが形も共に上円下方墳であることや埋葬施設も同じ3室構造の横穴式石室であるなど、同じ古墳時代の終末期に造られた2つの古墳には不思議なくらい、とても多くの共通点があります。

後の南武蔵には武蔵国府・国分寺が造営され、新し

く律令制による国づくりの中に組み込まれる時代を迎えます。その前夜、2つの古墳に関わる人物はどんな関係にあり、どんな役割を担った人だったのか。何故、全国でも類例の少ない上円下方墳という形がここで採用されたのか。また、首長である被葬者が支配していた領域はどこなのか、また集落や同じ頃に造られた横穴墓との関係は？など、1つの古墳だけでは不案内なことも、今後、2つの古墳の相互補完の研究が結集すれば謎が解けてくるかもしれません。

こうした史実をひとつずつ解明するためにも、また、古墳の占地の地形、土地柄や街道筋にあるのかを現地で実感することも大切なことです。三鷹市では、実際の古墳を通して市民の方々とともに歴史や将来を考える契機となることを期待しています。

国立天文台



見学のご案内

天文台構内古墳は、国立天文台常時公開コース見学（自由見学）の見学路から、ご覧になることができます（コースを外れて古墳に立ち入ることはできません）。

見学できる日 年末年始（12/28～1/4）をのぞく毎日

見学時間 10時～17時（入場は16時30分まで）

見学は無料。なお見学者用の駐車場はありません。

また近隣には、下記の見学施設があります。どうぞご利用ください。

三鷹市星と森と絵本の家	☎0422-39-3401	火曜日休館
出山8号墓保存・公開施設	☎0422-45-8351	水曜日休館
大沢の里水車経営農家「しんぐるま」	☎0422-45-1151（内線3315）	水曜日休館

バスのご案内（いずれの場合も、『天文台前』バス停下車）

- JR三鷹駅より 小田急バス 鷹51「調布駅北口」行き 三鷹駅南口2番乗り場より乗車。
- JR武蔵境駅より 小田急バス 境91「狛江駅北口」行き 武蔵境駅南口3番乗り場より乗車。
- 京王線調布駅より 小田急バス 境91「武蔵境駅南口」行き 調布駅北口11番乗り場より乗車。
- 京王バス 武91「武蔵小金井駅」行き 調布駅北口12番乗り場より乗車。

■お問合せ

三鷹市遺跡調査会

tel 0422-48-9454

fax 0422-71-0434

<http://www.mitaka-iseki.jp/>

「みたか遺跡展示室」

東京都三鷹市

天文台構内古墳

2011年3月31日発行

監修 天文台構内古墳調査委員会

編集・発行 三鷹市教育委員会

三鷹市遺跡調査会